

断想：2008年3月のタイ

儀我 壮一郎

目 次

まえおき

I チェンマイとタイ北部の「ランナー・タイ王国」寸描

II タイの諸王朝の歴史と現状

① 「スコータイ王朝」

② 長寿の「アユタヤ王朝」と短命の「トンブリ王朝」

③ 現在まで続いている「ラタナコーシン王朝」（「チャクリ朝」「バンコク朝」）

III タイの政治・経済・社会の諸側面

ま え お き

2007年度社研春季合宿研究会（2008年3月）では、3つの適切な目的が明示され、事前に、用意周到な研究会が開かれた。私などは、全研究会に参加しているうちに、すでにタイを訪ねて戻ってきたような気分になるほどであった。内田弘所長と村上俊介事務局長の緻密な計画と Ms.Ketsuda Supradit、佐藤正之氏はじめ準備に協力された方々の尽力にあらためて感謝する。

大倉正典所員のタイ中央銀行訪問のさいのディスカッションペーパー「タイ／インフレーション・ターゲットへの移行と課題」および DON NAKORNTHAB 氏のタイ中央銀行側の報告内容、黒瀬直宏所員の訪問先日系企業への予定質問事項の項目などが、事前に配布され、予習できたことも、まことに、有益有効であった。日本銀行総裁が「不在」の時期のタイ中央銀行訪問とタリサ総裁の簡潔明快な挨拶は、強く印象に残っている。

バンコクで、味の素訪問のさいに、タイの工場で「パルスweetを使用していますか」と質問し、「使っている」との回答を得た。私は、パルスweetにとどまらず、現在日本政府が「新型インフルエンザ対策」の柱としているタミフルを含めて、ラムズフェルド米国防長官（前）の多国

籍製薬企業さらには食品添加物への深い関与を検討中であり、近くその内容を明らかにしたいと努力中である。

ところで、ここでタイ族が重要な主体の「タイ王国」という、いわば当然のことがらについて、あらためて検討したい。中国とタイとの現在の関係を知るためにも、既発表の次の2つの小稿を参照していただければ幸いである。

- ① 中国の少数民族の諸問題〈雲南省麗江・昆明視察団報告〉(『専修大学社会科学研究所月報』No.462 2003年3月)。
- ② 多民族国家として中華人民共和国(専修大学『社会科学研究所年報』第41号、2007年3月)。

2008年8月の北京オリンピック大会のさいにも、56の民族から成る単一の「中華民族」という「中華人民共和国」の国のかたちが強調されていた。56の民族の中には、少数民族のタイ族約116万人(2000年人口センサス)が含まれ、その99%は雲南省に属している。ちなみに、雲南省は、中国全体の中で、少数民族の数が最も多い省である。

その雲南・中国と、現在の「タイ王国」を結ぶ約1100年の紆余曲折の歴史について、タイ族を中心に略述することが、この小稿の主題の1つである。もとより未定稿の段階であるが、上述の①②と併読していただきたい。

「タイ王国」(「シャム王国」)の成立までには、タイにおけるタイ族の諸王朝の興亡があったのである。

高発元編『雲南民族村寨調査 白族』(雲南大学出版社、2001年)によれば、西暦1253年、中国の雲南西部にあった段思平が建設した大理国(937-1253年の間存続)は元のフビライ(世祖)の攻撃によって滅亡した。その支配地域は902年滅亡した南詔国とほぼ同じであった。タイ族は、それ以後、長期にわたって南へ移動し、タイ、ラオスを含むインドシナ半島から、ビルマ、アッサム地方(インド北部)へと広範囲な地域に渡っていった。

往時のタイは、北部(現在のチェンマイとチェンセーンの両縣)まで強大なクメール族(アンコール王朝)の勢力圏にあった。また、メナム平野の一部からビルマ北部にかけては、モン族のハリブンチャイ王国(ランブーン、ランパーンが首都)が支配していた。

タイ族は、クメール族の王国と、モン族の王国の間隙を縫って勢力を伸ばしてゆく。しかし、強大な民族国家が誕生したわけではなく、部族国家が乱立する状態が長く続いた。

その後、1238年に、タイ族最初の王朝「スコータイ王朝」が生まれ、後「アユタヤ王朝」に吸収される。短命の「トンブリ王朝」を経て、「ラタナコーシン王朝」が生まれ、現在まで続いている。

北部タイには1259年、「ランナー・タイ王朝」が生まれ、以上の諸王朝と協調-対立しつつ併存していたが、1880年「ラタナコーシン王朝」に統合される。

I チェンマイとタイ北部の「ランナー・タイ王国」寸描

タイを訪れる日本人観光客の数は、1999年に100万人を突破し、その後も増加を続けている。タイは、ハワイ、香港、韓国などと並ぶ、上位の日本人渡航先となった。徳川幕府の鎖国以前の時期の日本人の海外進出の中で、アユタヤ（タイ）の日本人町が、東南アジア最大の日本人町であった歴史と重ね合せて、感慨深い。

日本は、2002年3月に始まった戦後最長の景気局面が終りを告げた（政府の8月の「月例経済報告」-8月7日）。その最長の「景気局面」のなかで、日本は、アジアとの関係を、広く深く強化してきた。2008年8月8日の北京オリンピック開幕の前日に、日本貿易振興機構（ジェトロ）は、2008年版の『貿易投資白書』を発表した。日本の上場企業の全世界での営業利益のうち、アジア・大洋州が前年比3.9%増の12.2%を占め、米州（8.7%）を上回って首位に立った。（上場企業に地域ごとの開示が義務付けられた1997年度以降初めて）。欧州も2.7%増の8.8%であり、収益基盤の多角化を示しているが、全体として、中国やタイを含む東南アジアが、「外需依存」の日本企業の重要拠点となったのである。

このような歴史的な文脈のなかで、日本企業は、タイの全輸出・雇用の約2割を占めている。バンコクでは、すでに1994年に、バンコク日本人商工会議所登録日本企業は1000社を超えていた（日・タイ経済協力会資料）。今回は、ニッサン・タイランド、いすゞ・タイランド、味の素などを訪問したが、まず、最初に到着したチェンマイから始めよう。

2008年3月14日、1259年発足の「ランナー・タイ王国」の首都であった、北部タイの古都チェンマイに到着。チェンマイは『北方のバラ』と呼ばれ、山紫水明のたたずまいであるが、宿泊先の「ホリデイ・イン チェンマイ」の最新の設備との対比から、複雑な「カルチュア・ショック」を受けた。古くから、メコン川を利用して、中国の商人は雲南から荷を運び、ベトナム・カンボジアからは、交易船が遡航して、異国の品をチェンマイに運んだ。文化が重層的に交流するなかで、タイ独特の仏教芸術も生まれた。チェンマイの人口は約20万人であるが、寺院の数は300を超え、そのうち121は、市内にある。チェンマイは、「ランナー王国」六代クーンナ王の仏教振興策によって「仏教修学」の中心地となり、1455年には、「世界仏教公会議」の開催地となった。「ランナー王国」は、明の大軍を撃破するなど、支配領域も拡大したが、16世紀前半には、災害・内戦などが続くなかで、1558年、ビルマ軍の攻撃を受け、チェンマイは陥落。その後200年以上、タイ北部はビルマの支配下におかれた。しかし、タイ内部の合従連衡と団結にもとづくビルマとの徹底抗戦を経て、1775年に、チェンマイは奪還され、城壁も再建された。その後、イギリスとの3次にわたる「ビルマ戦争」に敗れたビルマは、イギリスの植民地インドに併合された。また、後述の「アユタヤ王国」と多年にわたって抗争を続けた北部タイの「ラン

ナー王国」も、1880年、バンコクを首都とする「シャム王国」のラマ五世（1869年即位）によって併合され、タイは一つになった。帝国主義諸国が東南アジアへの侵略を続けていた中で、国際情勢を深く認識していたラマ五世は絶妙のバランス外交によって、自国・タイ＝シャムを、「東南アジアで唯一、ヨーロッパ列強の餌食にならなかった国」とした。ラマ五世は、内政においても、奴隷制の廃止など、「革命的」な政策を実施し、映画「王様と私」によって有名となったラマ四世とともに現在も、高く評価されている。

2008年3月15日、チェンマイを出発、一村一品運動の現状を視察した。手作りの精巧なモデルシップと少年労働者の姿や銀細工の数々を忘れられないが、何度も出会った象のことも心に焼きついている。

第1次～第3次ビルマ戦争（1824～86年）に勝利したイギリスは、ビルマを併合し、タイ北部のチーク材を大量に伐り出し、ラングーン（現在のミャンマーの首都ヤンゴン）を經由して輸出した。象を扱うタイ北部の山林労働者たちがその伐採と輸出に従事、最盛時には、およそ10万頭の象が使役されていたといわれる。現在、野生の象を含めて、3000～5000頭とみられるのであるからイギリスのチーク・ビジネスの当時の規模が窺われる。象は80年ほど生きるもので、タイの法律では、「象が61歳になったら使役から解放しなければならない」と定められている。人間の定年制を思い出して、象がとりわけ愛おしくなった。平穏なタイで、犬は、無警戒に仰向けに寝ころがるというが、象の心境はどうであろうか。

次節では、タイの歴史を概観し、未来を展望するための手がかりとしたい。ページ数を示していないが、基本的に、旅名人ブックス32 谷克二・鷹野晃著『タイ／ラオス歴史紀行 世界遺産とアジア文化の旅』第3版（日経BP企画、2008年4月）と富士国際旅行社の諸資料に依拠している。

II タイの諸「王朝」の歴史と現状

タイの国土面積は約51万3000平方キロメートル、日本の約1.5倍。人口は約6300万人で、日本の約2分の1。国境は、ミャンマー（ビルマ）、ラオス、カンボジアに接している。

タイの住民は、①タイ系（75%）、②中国系（14%）が大部分で、他にラオ、マレー、クメール、モン、カレンなどとされ、公用語はタイ語。他にラオ語、クメール語、マレー語、中国語などの言語が用いられている。宗教は95%が上座部（小乗）仏教、4%がイスラム教。まさに世界有数の「仏教国」であり、タイには2万8000余の寺院がある。

タイの歴史を顧みると、現在のタイの人々の心境を、より深く理解できると思う。同時にタイと日本との歴史的諸関係、新しい「東アジア共同体」構想におけるタイの地位と役割について

も、示唆が多いであろう。

中国南部から移住してきたタイ人が、現在の地域に定住したのは、11世紀頃のこと。最初のタイ人の国家は、「スコータイ王朝」とされるが、それ以前のタイは、メコン川に沿った部族の首長たちが緩やかに統治する領域（プリンシパリティー）があるだけで、実質は、隣国カンボジアのアンコール王朝の支配下にあった。しかし、13世紀、このクメール人の王国は衰退に向かった。

① 「スコータイ王朝」。

タイ人は、クメールの支配から独立する。スコータイは、周辺を統合し、シー・インタラティット王の代に独立を宣言（1238年）、勢力をマレー半島から現在のラオスにまで広げた。しかし、その勢いは14世紀後半に衰えを始め、1378年には、新しく台頭した「アユタヤ王国」に吸収される。この「スコータイ王国」の時代が、タイの政治、宗教、文化の「黄金時代」と見られている。タイ文化の源流には、クメール文化がある。クメールのアンコール王朝は、支配する地域から「聖なる水」を献納させることで、支配従属関係をはっきりさせていた。「スコータイ王朝」3代目のラムカヘーン王は、クメール文字に改良を加えてタイ最初の文字を創った王としても知られ、クメールの残した水道を利用して、山間の貯水池から陶管で清水を引き込むことにも成功した。

ラムカヘーン王は、北部タイのチェンライの王、パヤオの王と同盟を結んで元帝国の攻撃に備えた。王は、チェンライ王メンライに「ランナー・タイ王国」を興させた。その首都は当初チェンライ、後にファーンに移り、1296年に、「新しい都」を意味するチェンマイに落ちついたのである。

北部タイの「ランナー・タイ王国」は、後述の「アユタヤ王朝」と対立しつつ併存していたが、1880年、「シャム王国」に併合されたのである。

② 長寿の「アユタヤ王朝」と短命の「トンブリ王朝」

「アユタヤ王朝」（1350—1767年）は、33代、417年間続いた。王朝の創始者は、ウートン王（1350年）である。「スコータイ王国」を含む中央平原を領土とし、影響力は、マレー半島からビルマにまで及んだ。チェンマイを首都とする「ランナー王国」とカンボジアのクメール族に対しては、「力の政策」を取り続けた。文化面では、アユタヤはスコータイの忠実な継承者であり、儀式ではクメールの宮廷の作法や用語が用いられた。宗教儀式は、仏教とバラモンの司祭が取り仕切る。この伝統は現在のタイの宮廷でも続いている。

ラマティボーディー世（ウートン王が改称）は、行政を、王室・財政・内政・農業の4

部門に分け、王国を管理させた。1569年のビルマとの戦争の敗北によって、タイは、20年間も、ビルマの属国とされる。しかし、アユタヤ中興のナレスワン大王が1584年独立を宣言、ビルマ軍と9年にわたって闘い、アユタヤ王朝を再建した。ナレスワンは、強力なアユタヤ艦隊を設立、広大な海域で活動した。情報の収集、交易網の拡大にも成功したのである。

山田長政は、日本人傭兵部隊の隊長として、ビルマと戦って功績を上げた。山田長政の活躍は、日本が鎖国に入る直前の時期で、当時の日本人は、東南アジアの各地に日本人町を築いていた。代表的なものが、ルソン(フィリピン)、ダナンとホイアン(ベトナム中部)、プノンペン(カンボジア)、そしてアユタヤ(タイ)であった。アユタヤの日本人町は、後朱印船などによる日タイ貿易の隆盛を背景として、1500人を越える東南アジア最大の日本人町として栄えていた。山田長政の傭兵隊は、王の護衛兵まで勤め、1628年、宮廷内で王位争いが起こると、山田長政らは、王位継承者と目された幼い王子を立て、自らは摂政となった(1628年)。このことは徳川幕府に報告されたが、幕府は、長政の「摂政」という地位を認めなかった。「徳川幕府は不干渉」と知った反対派のプラサーメトン(後にアユタヤ王となる)は、アユタヤの日本人町を襲撃、炎上する日本人町から住民はカンボジアに逃げ去り、長政は、遠征の地で毒殺されたと伝えられている。

アユタヤの南東部のチャオプラヤツの川岸に、「アユチャ 日本人町の碑」と記された石碑が立っている。ここに日本人町歴史研究センターの建物があり、1990年に日タイ友好100年の記念に竣工されたのもである。

16世紀後半から18世紀半ばまでの「アユタヤ王国」は東南アジアで最も繁栄した王国であった。水運を軸に富を集め、世界でも屈指の大都市であった。アユタヤ城内には2000の寺院があり、王国の人口は100万人を超えていた。

アユタヤ王国の力は、ナライ王(在位1656-88年)死後の「半鎖国」状態やランナー王国との長期にわたる抗争などによって次第に衰えていった。

1765年から始まったビルマによる2年越しの攻撃で、アユタヤ王朝はついに滅亡する。この時、ビルマ軍は9万人の住民を奴隷として連れ去り、アユタヤの町を完全に打壊してしまった。

しかし、1768年、「トンブリ王朝」の始祖となるタクシン大王がアユタヤを奪還。しかし、タクシン大王は精神異常となり、1782年刑死。「トンブリ王朝」は15年間で消滅。

③ 現在まで続いている「ラタナコーシン王朝」(「チャクリ朝」「バンコク朝」)

「トンブリ王朝」は、短期間に終りを迎えた。その後の1782年、「ラタナコーシン王朝」

(チャクリ王朝、またはバンコク朝ともいう)のラーマ一世が、「シャム王国」としてのタイを継承する。バンコクは、このラーマ一世チャクリの時代に、シャム(タイ)の首都になった。トンブリは湿地が多かったので、ラーマ一世は対岸のバンコク(グルンラープ)への首都移転を決定、宮殿・寺院の建設を命じた。新都のイメージはアユタヤに求められ、廃墟となったスコタイ、アユタヤから、仏像や煉瓦が筏で運ばれてきた。チャクリ王朝の守護寺院「ワット・プラ・ケオ」別名エメラルド寺院の「エメラルド仏」も、トンブリの仏堂から移設された。(現地の『王宮ご案内』によれば、エメラルド仏はラオスに200年以上おかれていたがラーマ一世が將軍チャクリであった時期にラオスから持ち帰ったとされている)。このエメラルド仏が祭壇に祭られた時、世界一長い首都の名称が定められたが、諸外国は、首都名をバンコク(野生のオリーブの森)と呼んでいる。(長い首都名はここでは省略)。

王宮の南にある「ワット・ポー」は「涅槃仏の寺」とも呼ばれる。長さ46メートル、高さ15メートルの黄金色の「入寂するブツダの像」が横たわっている。その足の裏には、バラモン^{ラデン}の真理が百八つの螺鈿細工で書かれている。ブロンズの仏像は1000体以上もあるが、そのほとんどは、スコタイやアユタヤの廃墟から運ばれてきたものである。この寺院は、タイの伝統医学の中心地でもあった。ゆっくり見学したかったが、その時間的余裕が無かったのは残念であった。

三島由紀夫の小説によっても日本で有名となった「暁の寺」はラーマ二世(1809-24年)の建造による。ラーマ二世は、アユタヤ王国のナライ王の死後閉ざされていたヨーロッパとの交流を再開した。

「ラタナコーシン朝」(チャクリ朝)は、欧米列強が東南アジアへの侵略・支配を続けるなかで、ラーマ四世、ラーマ五世などの内政・外交が効を奏して独立を保ち、現在にいたった。タイ王国の元首は国王で、世襲制である。立憲君主制、議院内閣制であるが、軍部独裁の時期もあるなど政情は複雑である。現在のプミポン国王(ラーマ九世)は、チャクリ王朝の第9代目であり、シリキット王妃との間に1男3女がいる。

団の訪問中に、国王の姉が84歳で逝去、バンコクのいたるところに比較的若い頃の大きな写真が祭られていたことは印象的である。

Ⅲ タイの政治・経済・社会の諸側面

現在のプミポン国王は、「名君」として定評があるが、80歳を迎えたので、後継者の力量などが話題に上ることが多い。タイの政局は、大きな変化を続けてきた。1932年の立憲革命によっ

て立憲君主制へ移行した。第2次大戦中は親日派のピブン首相の対日協力によって日本軍の侵攻から免れた。ピブン政権下で、国名を「シャム王国」から「タイ王国」に改称した。1957年、サリット元帥が無血クーデターで独裁政権樹立。63年、タノム政権が成立。63年総選挙で議会政治に移行したが、71年のクーデターで軍政が復活。73年10月、民主化を求める学生・市民が軍と衝突、タノム政権が崩壊した、この時、プミポン国王の命令でサンヤ暫定政権が成立、74年に民主憲法を公布。76年の「血の水曜日」事件を経て、80年就任のプレム首相が民主化を推進。88年チャチャイ国民党党首が首相となり経済成長。91年、スントン軍司令官・スチンダ陸軍司令官がクーデターで憲法を停止、軍政を敷いた。92年3月の総選挙後の与野党激突の中で、プミポン国王が和解勧告、スチンダ首相が辞任。95年7月の総選挙でパンハーン国民党党首を首相とする7党連立政権が誕生したがスキャンダル続きで96年9月首相辞任。96年11月の総選挙後、6党連立のチャワリット内閣が発足、権力分散化を柱とする新憲法が97年10月11日に発効。経済危機のなかでチャワリット首相から民主党のチュアン首相に交替。

新憲法下の2001年1月の総選挙で、タクシン党首のタイ愛国党が第1党となりタクシン首相が連立政権を樹立。タクシン政権の「薬物撲滅作戦」は、多くの犠牲者を生み、鳥インフルエンザの情報隠蔽もあって批判を招いた。2006年のクーデターによって、タクシン首相は、国外に放逐されたが、総選挙後、連立政権を組織したサマック現首相（追記：2008年9月9日、憲法裁判所の憲法違反の判決で失職、内閣は総辞職）は、タクシン元首相に近いとされる。

インフレの進行の中で、サマック首相の退陣を求め2008年8月下旬、首相府を占拠し続けている市民団体や、労働組合、軍部、国王の動向と最大与党「国民の力党」の解党処分の可能性などが注目される。

2006年9月のクーデターで成立した暫定政権下で、タクシン元首相は13件の不正疑惑のうち3件で起訴された。妻のポチャマン夫人は、2008年7月末に脱税罪で禁固3年の有罪判決を受けた。タクシン元首相は、2008年2月に1年5ヵ月ぶりに帰国していたが、有罪判決の可能性が高いと見て、8月11日英国に入り、亡命する。

2007年通年で2.5%だった消費者物価上昇率は、2008年5月に7.6%まで上昇。1998年6月以来、10年ぶりの高水準となった（『日本経済新聞』2008年7月1日付）。

タイ中央銀行のDon Nakornthab氏も、石油価格の高騰を重視していたが、どのような対策が実施されているか、日本政府・日本銀行の対応と比較する意味で、その状況を知りたい。

タイ社会の最底辺で、幼児が買春の対象とされ、臓器移植のための人身売買の対象とされている。梁石日の小説『闇の子供たち』（幻冬社文庫、2008年）と阪本順治監督によるその映画化の内容は、あまりにも衝撃的である。「用済み」の子供がゴミ袋の中に詰め込まれ、トラックの中に「放棄」される映画の一場面など、まさに言語に絶する惨状である。